



長崎県立  
いさはや  
諫早東高校

学校改革

# 一点集中の生徒指導と 集中的な学び直して 地域の信頼を取り戻す

◎校訓は「自主自律」。1年生では習熟度別に標準・基礎クラスを編成、2年生では習熟度別に標準・発展クラスを編成し、その中で「文系」「理系」「看護系」の科目を選択、3年生では志望別に「文系」「理系」「看護・医療」「総合」の各コースに分かれる。インターンシップなどの特別活動も盛ん。

設立	1983(昭和58)年
形態	全日制/普通科/共学
生徒数	1学年約120人
13年度入試合格実績(現浪計)	国公立大は、長崎大、大分大などに4人が合格。私立大は、活水女子大、長崎総合科学大などに延べ6人が合格。他に、短大12人、高等看護学校11人、准看護学校3人、専門学校37人、就職32人、公務員3人。
住所	〒854-0205 長崎県諫早市森山町杉谷317
電話	0957-36-1010
Web Site	<a href="http://isahayahigashi.net/">http://isahayahigashi.net/</a>

変革のステップ

背景

◎少子化や周辺校の変化の影響で志願者が減少。更に、進路実績の低迷などもあり、2011年度から2年連続で入学者数が定員割れに

STEP 1

実践

◎生徒指導の徹底、学び直し教材の活用による基礎学力の定着、リーダーの育成による「自主自律」の精神の涵養を図る

STEP 2

成果

◎生徒の問題行動が激減し、学力下位層が大幅に減った。生徒会発案で挨拶運動を行うなど、主体性も見られるように

STEP 3

5年後、10年後の  
生徒、教師のために今すべきこと

長崎県南東部にある諫早駅から電車で20分。豊かな自然と田園に囲まれた長崎県立諫早東高校は地域の中堅進学校だが、この十数年で大きな課題を抱えるようになった。少子化に加え、都市部に近い場所に新設校ができ、私立校が送迎バスで生徒の通学の便宜を図るようになった影響もあり、次第に同校の志願者が減少。それに伴うように進路実績が低迷し、生徒の問題行動が目立つようになっていった。地域での評価もかんばしくなく、2011年度から2年連続で入学者数が定員割れした。1学年主任の鈴木勝久先生は、赴任当時を次のように振り返る。

「09年度入学生より1クラス減となったのですが、そのことが『諫早東高校が閉校になる』といううわさを生み、地域でまことしやかにささやかれるような状況でした。全ての先生がそんな状況を何とかしたいという気持ちを持っていましたが、どうすればよいのか分からずに戸惑うばかりでした」

閉塞感を打破するきっかけとなったのが、11年度に赴任した泉助義前校長の一言だった。

「諫早東高校は存続の危機にある。しかし、閉校かどうかは今決まる話ではない。現在の取り組みによって、5年後、10年後に決まる。その時、本校にいる生徒や先生に悔しい思いをさ

せないためにも、今ここにいる我々が頑張らなくてはいけない」と語り、教師を鼓舞したのだ。

## 生徒指導の苦手な教師も 指導しやすい状況をつくる

泉前校長が改革の2本柱に据えたのは、「生徒指導の改善」と「学力・進路実績の向上」だ。その方法はいたってシンプル。まず生徒指導で課したのは、体育館での集合時における無言整列だ。床のマス目に沿って縦横の列をそろえさ



長崎県立諫早東高校  
峰 祐志 みね・ゆうじ

教職歴30年。同校に赴任して3年目。進路指導主事。「高い志を持って行動すれば、必ず実現できる。勇気を持って挑戦していきたい」



長崎県立諫早東高校  
藤原勝志 ふじはら・かつし

教職歴26年。同校に赴任して3年目。生徒指導主事。「教師は『未来を創る』仕事。教師が夢を持たなければ、生徒に夢を持たせられない」



長崎県立諫早東高校  
鈴木勝久 すずき・まさひさ

教職歴24年。同校に赴任して4年目。1学年主任。「良い結果を得るためには、どうすればよいかを常に考えていきたい」



長崎県立諫早東高校  
山脇純子 やまわき・じゅんこ

教職歴21年。同校に赴任して4年目。生徒会主任。「生徒の良い面を見つけて伸ばせるよう、一人ひとりの生徒と向き合っていきたい」

せ、私語は一切禁止とした。進路指導主事の峰祐志先生は次のように述べる。

「指導の基本は『一点集中主義』です。生徒指導ではたくさん課題が目につき、生徒に一度に多くを要求しがちです。生徒指導は小さいことの積み重ねと考え、手を広げるのではなく、1つずつ課題を押さえて、ステップアップしていくことを心掛けました」

制服の指導では、襟元のホックまでは注意せず、第1ボタンをきちんと留めさせることから始めた。制服がだらしなく見えるのは第1ボタンを外しているからで、それさえ留めていれば、いわゆる「腰パン」も似合わなくなり、おのずと着こなしが整ってくる。取り組みの成果は、教師の予想以上に早く表れた。生徒会主任の山脇純子先生は次のように当時を振り返る。

「以前の集会では、教師や生徒会総務の生徒がいくら注意しても体育館がざわついていく状態が続きました。本当に無言整列など出来るのかと半信半疑でしたが、1学期の後半には教師が求めるレベルまで達しました。それ以降、生徒たちに落ち着きが出てきて、学校の雰囲気も急速に変わっていききました」

全校体制の指導を徹底する上で大きかったのが、生徒指導が苦手な教師への配慮だ。生徒指導主事の藤原勝志先生は次のように述べる。

「きれいに整列していると、制服や頭髮の乱れている生徒がすぐに分かります。そうし

た場で、私から先生方に『服装のチェックをお願いします』と声を掛け、一斉に指導してもらえば、生徒に注意するのが苦手な先生でも、生徒を指導しやすくなります。集会で教師が一斉に動き始めると、生徒も以前とは違う雰囲気を感じ取り、『きちんとしないといけない』という気持ちになるようです」

そうした指導を数回繰り返したところ、生徒は自分で制服の乱れを直すようになり、集会での私語や容儀の乱れはなくなりました。

## 年度途中に日課を変更し 毎朝1コマの朝学習を導入

学力・進路実績の向上については、朝学習を軸に進められた。11年6月、年度途中だったが、5分×6コマの日課を、45分×7コマに変更。1時間目を朝学習「モートレ」(モーニング・トレーニング)とし、小・中学校段階の基礎学力の定着を目指し、毎朝、全学年で国語・数学・英語の基礎的な問題に取り組んだ。各クラスに担任ともう1〜2人の教師が付き、一人ひとりに添削指導やアドバイスを行う体制を敷いた。ただ、クラスが生徒の習熟度や希望進路で分かれていたため、取り組み問題もそれに応じてクラスごとに異なっていた。そこで、学年団としての足並みをそろえるために、12年度にベネッセの学び直し教材「マナトレ」(\*1)を取り

\*1 ベネッセの『進路マップ』の教材の1つ。小・中学校範囲の学び直し専用のシステム教材。

\*プロフィールは2014年3月時点のものです

入れ、1・2年生の2年間で、基礎編・標準編に取り組むことにした。

「従来のモトトレは、教室にいる教師が添削指導していましたが、時間が掛かる上に、その時に教室が騒がしいこともありました。マナトレを取り入れてからは、自学自習を想定した教材の特徴を生かして、生徒が自己採点し、出来なかつた問題の解説を教師がする

ことで、効率化を図りました」（鈴木先生）  
しかし、今度は別の課題が浮かび上がった。「1年掛けてじっくりマナトレに取り組むことには、学習習慣の定着や達成感を味わわせる意義がありました。しかし、並行して授業もあるため、学び直したことが必ずしも高校の学習内容にスムーズにはつながらないと分かりました。もっと早い段階でマナトレを終わらせ、小・中学校の学習内容の基礎を身に付けさせる工夫が必要でした」（峰先生）

## 集中的な学び直しにより 短期間で基礎の定着を図る

これまでの改革の意思を継ぎ、山本寛瑞現校長の下、新入生研修で学び直しを行った。同校では、4月前半の5日間、体育館で礼法・学習指導を行う新入生研修「新風」を行っている。そこでマナトレを使い、短期集中で学び直しを完了させるようにした。

具体的な流れは次の通り。まず、1年生全員が体育館に机と椅子を持

って集まり（写真）、国語・数学・英語のマナトレを1日に各1コマ（45分）取り組む。



新入生研修でマナトレに取り組む様子

30分でプリント3枚を解き、残り15分で自己採点して提出。基準点に達しない生徒は、午後1コマ設定したマナトレの復習時間に個別指導を受ける。更に、各教科2枚を宿題として、5日間で各教科25枚取り組むようにした。これは、基礎編40枚の半数以上が研修で終わられる計算だ。残りのプリントは、1日2教科ずつモトトレで取り組ませることで、1学期終了時まで標準編（各教科40枚）が終わるようにした。

新入生研修やモトトレは、複数の教師で指導に当たるため、他教師の指導を間近に見て学ぶことも少なくないという。  
「優しく接する先生、高いレベルを要求する先生など、指導はさまざまです。他の先生がどのように生徒と接しているのを見ることは、自分の指導改善に役立つと同時に、教師同士の理解も深めました。生徒理解も大切ですが、教師理解も学校の一体感を保つために大切だと感じています」（鈴木先生）

## リーダーの育成により 「自主自律」の精神を実践

学習環境が整ったのを見計らい、校訓である「自主自律」の涵養へと指導を進めた。その中心となるのは、リーダー育成だ。生徒会役員と各部の部長の約20人を、新入生研修で挨拶や校歌斉唱、集団行動の指導などに当たらせる。事前に1泊2日のリーダー研修を行い、新入生研修での自分たちの役割や心構えを教える。どうすれば新入生が大きな声を出せるようになるのかを話し合わせ、先輩役と新入生役に分かれるロールプレイ形式の練習もする。そして、新入生研修当日は、リーダーに1年生への指導を任せ、教師はほとんど口を出さないのだという。

「新入生が思うように動かない時だけ、教員はリーダーに『こんなふうに声を掛けてみたら？』とアドバイスします。新入生が自分たちの思うように動かないことに、もどかしさを感じるリーダーもいます。そこで、『先生も大変なんだ』と気付いて、自分のクラスでも『もっと声を出そう』などと、他の生徒を引っ張るようになります」（藤原先生）  
リーダーを経験した生徒の多くは、その後も体育祭実行委員など、行事の中心となって活動する。13年度の体育祭では、生徒中心に団分けや種目の決定、当日の運営などを行った。また、実行委員には部活動顧問などの推薦で選ばれた

\*2 ベネッセの『進路マップ』の教材の1つで、1・2年生を対象とした記述テスト。幅広い学力層に対応する出題内容となっている。  
\*3 生徒の学力到達度を<S>~<D>のゾーンで示す、ベネッセの学力指標。Dゾーンは、「基礎・基本養成レベル」を指す。

## 生徒の声「リーダー研修を振り返って」

「私は自信が持てず、自分はリーダーに向いていないと思っていましたが、部の代表としてリーダー研修会に参加し、後輩を指導するための研修を受けました。すると、大きな声を出すことが苦手だった私が、少しずつ自信と自覚を持てるようになり、新入生の指導を頑張ろうと思いました。新入生合宿でどう指導したらよいか直前まで不安でいっぱいでしたが、新入生を前に覚悟を決めて、礼法や校歌を大きな声で新入生に指導しました。後輩は私の指導に素直に従ってくれました。指導後は、声がかれ、汗びっしょりとなり、やり切ったという達成感がありました。リーダー研修と新入生合宿を通して、リーダーとしての自覚、人前に立つて指導する立場や気持ちを経験し、どんなことでもやってみないと分からないことに気が付きました。この経験を通して、自分に自信が持てるようになったこと、どんなことでも積極的に行動してみようと思うようになったことが、私自身の大きな変化です」

\*編集部が原文を編集して掲載

**小規模校の特性を生かして  
手厚い指導を実践**

一連の改革により、同校は地域の信頼を取り戻しつつある。生徒の問題行動はほとんどなく

1・2年生のリーダー候補も参加し、先輩の活動を間近で見ながらリーダーシップを磨く。13年度には、生徒会の会長・副会長と各部の部長が、挨拶運動のプロジェクトチームを立ち上げた。「廊下で立ち止まって挨拶をしよう」などと月間目標を決めて、生徒に呼び掛ける。生徒間で温度差はあるものの、徐々に協力する生徒が増えているという。

## 若手教師が語る、指導変革への情熱

### 学校を全体から見る 意識を養うことが出来た

生徒会主任 山脇純子

前任校がアットホームな離島の学校だったこともあり、本校に赴任した4年前、生徒の気質や学校の雰囲気の違いに戸惑うばかりでした。頑張ってもうまくいかないこともあり、赴任1年目は、もがき苦しみました。先生方や生徒の励ましに支えられて乗り越えられました。ようやく光が見えてきたのは翌年4月、泉前校長が赴任され、改革の方向性を示していただいたからです。体育館できちんと整列する生徒を見て、私たちがやれば出来るようになるようになりました。

2012年度には、更に学校を活性化させるために、4人の先生方とチーム「from EAST」を立ち上げました。本校の現状を分析し、新入生指導・キャリア教育・学校行事の3分野について全教員にアンケートを取り、どのように改善を進めていくべきかを話し合いました。

それまでの私は、教育活動を教科担当やクラス担任、生徒会主任としての立場から考えるだけでした。しかし、「from EAST」の取り組みによって、学校を全体から見る視点や意識を養うのと同時に、複数の意見を調整していく力を高めることも出来たと思います。

本校の先生方には、良いと思うことは何でも取り入れようというフットワークの軽さがあります。さまざまなアイデアを持っている方も多いので、そうした先生方の声を吸収しながら、より良い学校になるよう、私も積極的に働き掛けていきたいと思っています。

なり、13年度の高校入試では3年ぶりに定員が充足した。「子どもたちを見て、学校が変わろうとしていることが分かる」という保護者の声も聞かれるようになった。

生徒の変化を受けて、教師の意識も変わっていった。当初は「そこまでしなくても」という声もあったが、教師が変われば生徒は変わるという意識が共有され、学年団が積極的に指導計画を立てたり、教師が個別に生徒にかかわったりする場面が多く見られるようになった。学力面も好調だ。13年度1年生はベネッセの6月の実力診断テスト(\*2)において、D3ゾーン(\*3)の生徒が例年より大幅に減少した。平均点偏差値も全教科で3〜4ポイントも上昇した。

今後の課題は、生徒全員の進路決定を図りながら、進路実績を向上させていくことだ。同校では、改革初年度から成績上位層への個別指導を徹底したところ、例年1人程度だった国公立大合格者が、12年度および13年度入試では4人に増えた。個別指導を更に充実させ、順調に実績を上げていきたい考えだ。

「本校の周辺校は生徒数が800〜1000人であるのに対して、本校は300人程度の小規模校です。しかし、小規模校だからこそ、低学年から個別指導を行い、生徒を引っ張り上げる事が出来ます。そのような小規模校であることの強みを地域にアピールできる学校にしたいと思っています」(峰先生)

今回のテーマに関連する過去の記事はベネッセ教育総合研究所のウェブサイトでご覧いただけます。

2013年6月号指導変革の軌跡「神奈川県・私立三浦学苑高校」など

▶▶▶ <http://berd.benesse.jp> → HOME > 教育情報 > 高校向け